

コミンテルンと天皇制

—片山・野坂は32テーゼの天皇制絶対化に懐疑的だった—

富山大学名誉教授 / ロシア思想史専攻 藤井 一行

この数年、私はトロツキーの日本論について調べてきた。日ロ戦争論とか、日本革命の性格とか、「田中メモランダム」とかの問題についてである。かなりの研究結果が蓄積された。それらについてこれから徐々に発表していきたいと思っている。

ここではその一端として、「32テーゼ」をめぐるいくつかの問題をとりあげてみたい。

幸い、最近、コミンテルンの「極秘史料」集がロシアで刊行された。ВК П (6), Коминтерни Япония. 1917-1941 гг., (М., 2001) という書物である。題名を邦訳すれば「全連邦共産党(ボ)とコミンテルンと日本. 1917年-1941年」。監修者は Грант Алибеков (グラント・アヂベコフ), Харуки Вада (ハルキ・ワダ)。編者には、日本のロシア史研究者も何人か加わっている。これまで世に知られていなかった史料が数多く収録されていて、コミンテルンと日本支部との関係の未知の側面を知ることができる貴重な書物である(以下、「アヂベコフ」と略記)。

天皇制の位置づけ

「27テーゼ」でももちろん君主制の廃止という課題はかけられているが、それはいわば封建的残滓の一部の除去といった意味づけで、絶対権力としての君主制という視点ではなかった。

しかるに、1928年のコミンテルン執行委員会決議(10.5)には早くも方針転換が見

られ、君主制との闘争が前面にかけられるようになる。決議の結びはこうである。

党は「封建的搾取ならびにブルジョア反動の権化としての、日本人民の刑吏、植民地絞殺者、中国革命の凶悪きわまりない敵、きわめて犯罪的な世界戦争挑発者の一員としてのミカド」の役割を大衆に明らかにすべきである。

ミカドはもはやロシアのツァーリ並みの位置づけである。ことによると田中首相が天皇に上奏したとされるいわゆる「田中メモランダム」をすでに入手しての政策変更であったかもしれない。ソ連のGPUがその頃、日本の在外公館から「田中上奏文」を入手してクレムリンに届けたという複数の証言がロシア側にはある。

しかし決定的な要因はロシア共産党内で支配権を確立したスターリン派による異見排斥路線のコミンテルンへのもちこみであった。

1930年秋、「27テーゼ」にたいする公然たる批判がはじまる。これはトロツキーやブハーリンのコミンテルン追放と無関係ではない。トロツキーは1927年9月に幹部会員候補を解任され、1929年7月にはブハーリンがコミンテルン幹部会から追放される。いずれもスターリン派閥による支配権が確立されたロシア共産党のコミンテルンにたいする強要の帰結である。

ヴォルクの起草になる文書「分析資料『1927年の日本にかんするテーゼの主たる誤謬』(30.11.28)は、「27テーゼ」を全

面批判し、当面する革命を「大量のブルジョア民主主義的課題をかかえたプロレタリア革命」と規定する。

また「東洋書記局テーゼ草案『日本資本主義の現代の危機と日本におけるきたるべき革命の性格』(31年1月)(サファーフ起草)は、日本共産党の主たる要求の第一に、「ミカドの君主制と金融資本全体の独裁の革命的打倒、プロレタリアート独裁の樹立」をかかげていた。

それが、「32テーゼ」段階では、日本の君主制の性格についていっそう絶対主義的なものと把握するとともに、他方で、革命の性格についてはプロレタリア革命路線をきっぱりとしりぞける。

「32テーゼ」の策定にあたった中心人物は、クーシネンである。コミンテルン内部ではクーシネンは当時、執行委員会幹部会の一員(スターリン、ブハーリン、片山とともに)であり、かつブハーリンと並んで決定・執行機関としての政治書記局のメンバーでもあり、さらに「東洋地域書記局」の責任者でもあった。ブハーリン追放後にはかれが東洋問題で指導権を掌握することになる。第7回大会(1935年)以後も日本・朝鮮などを担当する書記局の責任者としてとどまる。

クーシネンは「32テーゼ」報告で、「君主制との闘いの巨大な意義の軽視」を、日本の共産主義者の誤りとして批判する。

片山の天皇制観

クーシネンによれば、コミンテルン側が君主制の自立的役割についてのべたことについて日本の一部の者は、「君主制の役割の明確な誇張」と見た。日本の「絶対君主制」は1868年以後に成立するとする主張にたいする反論があるが、それまで封建制度の中で完全に支配していた「傀儡君主制」はブルジョアの諸変革の当初に——復古のスローガンのもとで——今日の「絶対主義的君主制」の制

度が変わった。日本には議会と憲法があるのだから、「絶対主義的君主制」を云々するのはおかしいとる反論もあるが、憲法は紙の上だけのものであり、議会は「傀儡議会」にすぎない。

では日本側はクーシネンの批判をどう受けとめたか? 「アヂベコフ」には、1932年3月2日のコミンテルン執行委員会幹部会の会議での片山潜と野坂の発言が収録されている。

片山は、クーシネン提出のテーゼを完全に支持するとしつつも、いくつか改善すべき点があるとし、日本資本主義についての過小評価、君主制と地主、ブルジョアジー、官僚との相関関係が不明確、三つの支配勢力の結合という定式の意味、三つの権力の中心の相互依存の意味が不可解とした。

ちなみにかれはかつて「日本共産党綱領」(1922.1.3)というものを起草しているが、そこにはこう記されていた。

「日本は、貴族院と衆議院の2院からなる議会をもつ立憲君主国とみなされているとはいえ、権力を握っているのは、『元老政治』の呼称のもとに存在する政治家集団である。この30年間、あるいはそれ以上にわたって日本を統治してきたのは、『元老』で、現在それを率いているのは山県公爵である。かれは官僚と軍の事実上の支配者で、国内で絶大な影響をもっている。自由主義的たると反動的たるとを問わず、すべての官省は『元老』の手中のおもちゃでしかなかった。」

その頃の日本の共産主義者の間では天皇=絶対者説をとる者は少なかったようである。荒畑寒村は1923年5月のコミンテルン第3回総会で、つぎのように報告している。

「ミカドは官僚の掌中で人民大衆を奴隷化する道具であったように、ブルジョアジーもみずからの利益を守るための道具としてそれを利用している。ブルジョアジーはミカドにたいする日本人民の一般的気分を完全に考慮

している。」

野坂にしてもそうであった。加藤哲郎氏が新たに発見した史料によれば、野坂は1928-29年に君主制打倒のスローガンをかけけることに「異論」を示していたという(『党創立記念日』の神話学)近刊)

片山は、31年7月19日、東洋書記局での審議にさいして、すでに文書で意見を提出し、テーゼでの君主制論は現実に則しておらず、立憲的制約を無視して、「絶対君主制」ととらえていると批判した。先のクーシネンの批判は片山をも念頭においたものである。

野坂は党内にあった謬論に詳しく論及するが、かれの発言は当時の日本の共産主義者がどう考えていたかを率直に表明したものととして注目される。

歯切れの悪い野坂発言

「われわれの考え方では、君主制はほとんどブルジョアジーの傀儡である。君主制は政治の舞台ではいかなれば重要な役割を演じておらず、ブルジョアジーと地主の手中にある道具にすぎない。君主制には自分自身の利害や権力が欠如しているとされる。しかし、そのような見方は歴史の見地からも政治の見地からもひどい誤りである。君主制とブルジョアジーとの相互関係の歴史は、ブルジョアジーと君主制との間の妥協と連携の歴史である。両者は互いに利用しあっている。ブルジョアジーが君主制を打倒することが必要だと考えなかったのは、第一には、君主制がブルジョアジーの利害の誠実なブローカーとして働き、資本の利害と不可分に結びついていたからである。また第二には、帝国主義的な略奪と侵略と拡張のために、また同時に労働者と農民の革命的運動の制裁のために軍国主義的な君主制権力というものがあるのだ。」

コミンテルン指導部の権威によって否定されたものの、内心では必ずしも同意していないように聞こえる。野坂の発言はすこぶる歯切れが悪い。それに続く部分を引用してみる。

「同志諸君、われわれが誤った考え方をした結果犯した三つの重大きわまりない誤りは以上のようなものである。新しいテーゼは当該問題では絶対的に明快であり、われわれの誤りをしりぞけている。したがって、内容にかんしては私にはいかなる反論もない。しかし、同志片山がのべたように、われわれには、革命の性格についても、君主制の性格についても適切な理解が不可欠である。そのような問題提起には賛成である。事実、第一部には日本資本主義の膨張と君主制との相互関係が示されている。しかし、その部分では、君主制の地位が高まったという徴候が記されているだけで、ブルジョアジーの役割、資本家の役割についてはほとんどなにもべられていない。この問題はもっと明確にされなければならない。」

絶対主義的君主制の打倒を第一とするクーシネンの報告と「32テーゼ」の成立にかんしては、日本帝国主義の新たな野望の進行という事実も一因であったかもしれない。というのは、1931年の暮れの各国語版のコミンテルン機関誌には、その証として、いっせいに、「田中メモランダム」が公表されるからである。同年の日本軍の満州への大規模侵攻(いわゆる「満州事変」)は、「田中メモランダム」に描かれた天皇の対外侵略計画の第一歩と受け取られた可能性もなくはない。アキこと山本正美も当時のコミンテルン機関誌に一文を記し、「田中メモランダム」を引用しつつ、日本帝国主義を糾弾した。

しかし、それにしてはコミンテルン指導部の方針は一貫していない。またしてもジグザグ=転換が起こる。

一部修正・削除された日本代表演説

1934年2月の東洋地域書記局の会議での日本問題でのクーシネン報告では、まだ君主制権力の打倒という課題をかかげていた。

だがその後すぐに転換がおこなわれる。そのあらわれは、第7回コミンテルン大会での岡野・田中・西川の演説にたいする修正・削除問題である。「アチベコフ」の編者注解は、1935年に刊行された「第7回コミンテルン大会・戦争と飢餓と無権利の体制に反対する日本共産党」というパンフレット（ロシア語版）では、実際の演説とは異なる修正がほどこされていることを明らかにしている。修正は、天皇制にかかわってのもであった。

まず岡野演説からはつぎの一節が削除されている。

「プロレタリアートの勝利をめざす正しい方針の策定をめざす闘いは1932年まで続いた。コミンテルンの西欧ビューローのテーゼは党の発展とそのポリシェヴィキ化において重大な役割をはたした。そのテーゼは、現在の主な敵が軍事的・警察的君主制であることを党に指摘した。それは日本帝国主義にたいする闘いで党を武装させ、党に明確な展望をあたえ、プロレタリア独裁への唯一の正しい道を示した。」

また「君主制は日本人民を恥辱で覆った」という語句のうちの、「君主制」が「日本帝国主義」に修正された。

田中演説では、日本共産党の主な課題から、「戦争と君主制に反対し、米、土地、自由、労働者と農民の政府の樹立ををめざす人民革命」という部分が削除されている。

また「わが党は、日本の勤労人民を警察的反抗のくびきから、＜警察的・君主制的くびきから＞、地主への隷属および資本家の搾取から解放するために、日本のすべての勤労者の幸福な生活のために献身的にたたかっている。わが党は、戦争と＜軍事的君主制的＞ファ

シズムに反対して、自己犠牲的にたたかっている。」の一節から＜＞内が削除されている。

西川演説では、「日本の君主制政府」が「日本の支配階級」に変更され、「ミカドの宮廷」「君主制の全機構」が削除された。

つまりコミンテルン大会で、野坂等の日本代表は「32テーゼ」に忠実にしたがって報告をおこなったのに、それを公表する段階でコミンテルン指導部側が君主制問題に関連する事項で修正を迫ったことがわかる。日本側はいわば二階に上がって梯子をはずされたわけである。

翌年の「コミンテルン執行委員会書記局の日本問題にかんする決議」（1936.3.8）では、日本共産党にたいしてつぎのような三つの方針が決定される。

- 1 主敵は「ファシスト軍閥」。
- 2 「ファシスト軍閥」、金融王、大地主の陣営に反ファシスト人民戦線を対抗させること。
- 3 現段階での基本的スローガンは、軍事ファシズムの独裁に反対し、民主主義日本、普通・自由・平等・直接・秘密選挙にもとづく人民の憲法制定会議をめざすということ。

君主制打倒という課題が完全に欠落する。

帝政ロシアでは皇帝が帝国主義戦争の元凶であっただけに、ツァーリズム打倒なしの戦争阻止はありえなかった。日本で君主制打倒なしに民主主義日本が可能だということは、日本の君主制がツァーリズムのような「絶対主義」的なものではないことを自認したことを意味する。コミンテルン指導部の自己否定である。

そのコミンテルン指導部の新たな姿勢を反映しているのが、有名な「コミンテルン第7回大会の諸決定についての日本の共産主義者へのオカノ（野坂参三）とタナカ（山本懸蔵）の手紙」（1936年3月）である。

天皇制問題について「手紙」は言う。

「われわれは、広範な人民大衆が、君主制打倒をめざす公然たる闘争の準備がまだできていないということを考慮していなかった。なぜなら、われわれとしては完全に払拭しきっている、排外主義的偏見と君主制にたいするあらゆる幻想が、広範な大衆としても払拭できているとわれわれはとらえていたからである。しかし、大衆は、みずからの政治闘争の経験によってしか幻想を払拭しえないのである。」

こうして、当面の闘争課題からは絶対主義的君主制打倒という課題がおろされる。

もっともコミンテルン指導部のそうした姿勢は、野坂等日本側の本来の意向にそうものであったはずだ。1945年7月の中国共産党大会での野坂演説は、この路線の延長線上にある。コミンテルン解散の結果、日本側は一定の自主的判断が可能になったということであろう。

今日の時点から見て、日本の共産主義者の方が天皇制の実態をリアルにとらえていたと言えるように思う。

クーシネンのトロツキー主義批判の真意

もうひとつの問題。それは当面する革命の性格についてである。

クーシネンは、「日本の一部の同志たち」の誤りなるものについて、「かれらは、革命の性格にかんする問題を日本の特殊性に即して提起しようとせずに、革命の性格をプロレタリア革命と規定した。限られた数量の事実をもとにして、時期尚早な結論をひきだした。そのために、トロツキー主義者のそれに似た結論が出た」とする。

そしてそれに続けて、「<ここでわれわれの間でのべられたなんらかの意見をトロツキー主義的偏向だとかトロツキー主義的密輸だとか呼ぶ根拠はわれわれにはない。その問題にかんするスターリンの手紙による酷評に関連して発言したわが同志たちはみな、トロ

ツキー主義と断固たる闘争をおこなっている同志たちである。>しかし、先に指摘した偏向、その「左翼的」誤りは、きわめて有害な政治的意味をもっていた。それは、ほかでもなく、日本の君主制に反対し、日本における資本主義（ママー藤井）の残滓に反対する闘争の過小評価である。」

この引用文のうち<>内の一節はなぜか邦訳には欠落している。（既存の邦訳の底本はロシア語とされるが、私が引用した「アチベコフ」のテキスト（ロシア語）のオリジナルは注解によれば、ドイツ語である。）

この部分にこそ「32 テーゼ」策定の重要な鍵がひそんでいる。

それは、クーシネンが、日本革命の性格をプロレタリア革命とする立場にトロツキー主義というレッテルをはりつけていること、ならびにトロツキー主義を論難したスターリンの手紙をもちだしていることである。後者の問題から検討しよう。

スターリンは1931年に、党中央委員会付属レーニン研究所の雑誌「プロレタリア革命」に「ポリシェヴィズムの歴史の若干の問題」という編集部あての手紙を発表した（第6号）。これは悪名高いイデオロギー規制・異見排除の指針で、その後のソ連のイデオロギー分野で「魔女狩り・異端狩り」の原理・基準となっていくものである。

スターリンはそこで、トロツキー主義を、間違っているにせよ、共産主義の一翼であるとみる一部のポリシェヴィキの「腐った自由主義」なるものを糾弾し、いまやトロツキー主義は「反革命ブルジョアジーの先遣隊」と化してしまっているとし、イデオロギー分野への「トロツキー主義の密輸」に反撃しなければならぬとした。

クーシネンは、コミンテルンへの「トロツキー主義の密輸」を摘発するという任務を引き受けた。そしてそのさいに「トロツキー主義」の標識としたものが、当面の革命の性格

をブルジョア民主主義革命ではなく、プロレタリア革命とする立場だったのである。

もうひとつの例証として1931年6月20日付のヴォルク起草になる「日本共産党の任務についてのコミンテルン執行委員会東洋地域書記局のテーゼ」をあげることができる。これは「32テーゼ」の原案となった文書（あちこちに同じ文言が散見される）で、「官僚的絶対君主制」規定をかかげつつ、当面する革命を「ブルジョア民主主義革命の、プロレタリア社会主義革命への急速な成長転化」と規定していた。かれは前述のように、つい半年まえには、「27テーゼ」を批判し、当面する革命を「大量のブルジョア民主主義的課題をかかえたプロレタリア革命」と規定していたのである。（「分析資料「1927年の日本にかんするテーゼの主たる誤謬」」（30.11.28）

ヴォルクの新テーゼ案の日付に注意したい。スターリンの手紙の発表の時期とほぼ一致している。スターリンの指針にもとづいて自説を変えたと見るべきであろう。それは32年3月のクーシネン報告の先取りである。

クーシネン報告に見られるトロツキー論は、トロツキーの所論のスターリン主義的歪曲（代表例はスターリンの「レーニン主義の基礎」1924年）の受け売りにすぎず、革命の連続性にかんする無知に由来するものであった。ロシア革命におけるブルジョア民主主義革命とプロレタリア革命との連続性——それをトロツキーは「連続革命」と呼んだ。従来、かれの概念は「永久革命」とか「永続革命」とか邦訳されてきたが、前者は完全な誤訳ないし歪曲であり、後者にしても適訳とは言えない。トロツキーが使用するロシア語のперманентная революцияの形容語перманентнаяは「連続した」「断絶のない」という意味である。現にスターリン自身が「レーニン主義の基礎」で、перманентнаяということばをнепрерывная（断絶のない）

として説明している。

トロツキーのスターリン「段階革命論」批判

トロツキーによれば、「民主主義革命の指導者として権力についたプロレタリアートの独裁は、不可避免的に、かつきわめて急速に、ブルジョアの所有の権利にたいする深い侵攻と関連した任務をみずからに課す。民主主義革命は直接に社会主義革命に成長転化し、まさにそのことによって連続革命となる。」トロツキー自身が「成長転化」論を連続革命論と同視していることがわかる。（『連続革命』1930年）

そうした考え方は、レーニンも共有するものであった。レーニンは「十月革命四周年によせて」で、ブルジョア民主主義革命と社会主義（すなわちプロレタリア革命）の関係の問題にかんする「われわれのマルクス主義理解の正しさ、従来の諸革命の経験の考慮の正しさ」がそれまでの四年で完全に確証されたとして、こういう。

「われわれは、ブルジョア民主主義革命をだれもやらなかったほど最後まで導いた。われわれは、完全に自覚して、断固として、不屈に社会主義革命にむかって前進しつつある。……

われわれは、ブルジョア民主主義革命の諸問題を、われわれの主要な、真の、プロレタリア革命的な、社会主義的な活動の「副産物」として、通りすがりに、ことのついでに、解決しようとした。……

メニシェヴィキなどは、……ブルジョア民主主義革命とプロレタリア社会主義革命とのそのような相互関係が理解できなかった。前者は後者に成長転化する。後者は前者の諸問題をことのついでに解決する。後者は前者の事業を定着させる。後者がどれだけ前者を成長転化させることができるかを決するのは、闘争、ただ闘争だけである。」

ちなみに、『レーニン全集』の事項索引に

は、「ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化」(理論)という項目があるが、その中にさらに、「単一過程としてのブルジョア民主主義革命と社会主義革命」という項目が設けられていることはあまり知られていないようである。これこそ両者が、切り離しがたい一つの過程であることを示す概念なのである。

スターリン＝クーシネン流の「段階革命」論についてトロツキーはこう批判している。「東洋諸国のプロレタリアートに勝利への道を切り開くためには、まずはじめに公式主義的で反動的なスターリン＝マルトウイノフ流の『段階』理論を廃棄すべきだ。……発達水準の異なる国々に順番を設けて、まえもっていろいろな革命の配給切符をくばるというスターリン＝クーシネン流の思想を放棄せよ。」

トロツキーによれば、クーシネンは、「先進諸国でも後進諸国でもプロレタリアートの独裁というスローガンをかかげるなどということとは想像しがたいことだと考えている」のだ。

〈ブルジョア民主主義革命の課題をもちかえたプロレタリア革命〉という規定と〈ブ

ロレタリア革命へと急速に成長転化するブルジョア民主主義革命〉という規定は、単一の連続した革命の過程を別の形で表現しただけのことではないか。だがスターリン＝クーシネンの単細胞的な頭脳では、その違いでトロツキー主義か否かにわかれるのである！

ちなみにトロツキー派は、日本の革命の性格についてこうのべていた。

〈それらの封建的残滓が存在することを理由として……日本の社会的発展の当面の段階を民主主義革命であると考えすることは誤りであるだろう。それは、スターリン派の皮相的かつ日和見主義的な判断である。プロレタリアートと農民を同時に支配しているブルジョア的な所有関係と資本主義的搾取方式は、労働者と農民を救う唯一の道としての、支配階級の革命的転覆とプロレタリアート独裁の樹立を必要としている。〉

君主制打倒の問題に独自の意義をあたえられていないことも注目される。

(紙幅の関係で詳論できなかったことが多く、文献出所も示せなかったので、私のWebサイト(URL <http://ifujii.com>)で補いたいと思っている。)